

## 「新年の空の美しさを見ながら」

新年を迎えました。謹んで新年のご挨拶を申し上げます。今年もどうぞよろしくお願いいいたします。皆さんはどのような期待をもって、新しい年を迎えたでしょうか。寒さが続きますので、皆さんのご健康が守られますようにお祈りいたします(写真は青ノ山山頂展望台)。



季節によって空は色も雲の形も違い、太陽との関係で、その季節にしか見ることのできない特徴的な美しい空があるのも事実です。先月も別の本を紹介しましたが、私の手元に「空の名前」(角川書店、1999年初版発行・古本購入)という本があり、6つの章に分かれています。その中で「4.光の章」というという項目には、空と光の関係によって生み出されたいろいろなことばが、写真と一緒に出てきます。私たちが時々耳にする「黄昏」(たそがれ)、「夕映え」(ゆうばえ)、「東雲」(しののめ)などの説明が美しい空の写真と共に載っています。

そして一番興味を引いたのが129ページに出てくる「天の梯子」(てんのはしご)というものです。しかもそこにはこのように説明されています。「ヤコブが、イサクから祝福を受けてイスラエルの地に旅した時、ある土地で石を枕に寝ていると、天に通じる階段が出来て、天使が上がり下りたりしているのを夢に見た。『ヤコブはここが天の門の地と知り、神に祈ってここにイスラエルの国をつくった。(旧約聖書 創世記第28章)』 雲の切れ間から射し込む幾筋もの神々しい御光は、あたかも天と地を行き交うための階段のように思えます。そこでヨーロッパでは、これを天の梯子、ヤコブの梯子などといっています。」と書かれていました。実際に気象学上の用語ではないようですが、このように一般の解説つき歳時記風の天気図鑑に聖書のことばが引用され、また説明されていることに嬉しさを感じ、ヨーロッパでは空に浮かぶ雲の切れ間から光が射し込む様子を「天の梯子」「ヤコブの梯子」と表現していることにも感心しました。空や天候、季節の移ろいに関することばは奥深く、大自然のみならず、目に見える風景や光景は、決して偶然にできたものではないことを実感します。聖書の詩篇19篇1節には「天は神の栄光を語り告げ 大空は御手のわざを告げ知らせる。」とあります。また聖書の一番最初にも「はじめに神が天と地を創造された。」と書かれているように、神様が大自然やすべてのものを造ってくださった「創造者」あるいは「創造主」です。私たちの目の前にあるものが決して偶然にできていないように、私たちが普段、利用する建物や乗り物すべてにおいて、それが完成に至るまで設計者や製作者、製造者が関わります。家庭の生活用品もそうです。また私たちは、私たちの体を調べる時に、またその事実を知る時に、私たち人間をも造ってくださった天地万物の創造者である神様が確かにおられることを認めるのです。

この時期は多くの人たちが、おもちを食べます。地方によっては、いろいろな料理の仕方や食べ方があります。この香川では「あんもち」を雑煮に入れて食べるのが、文化また郷土料理のようです。関東に生まれ育った私にとっては、「あんもち」は最初、違和感がありましたが、慣れてしまえば、実においしいものです。私が子どもだった頃のシンプルな食べ方は、アルミホイルの上に切り餅を置いて、それをストーブの上に置いて、ふくらむ頃に、そのまま醤油(砂糖醤油)やきな粉につけたり、海苔で巻いて食べました。おもちはすぐに固くなってしまいます。焼いたおもちやレンジで温めたおもちなどをお皿に置いてしばらくすると、お皿にくっついてしまい、なかなか取れなくなってしまいます。お箸で食べれば、今度はお箸におもちが少しついてしまい、洗いにくくなります。おもちを食べたとしても、胃の中で、胃におもちがくっついてしまったり、固くなってしまって、胃や腸の中で詰まってしまうことがほとんどないのは、やはり、だ液や胃液をはじめとして、さまざまな大切な働きが体の中にあるからだと思うのです。人間の体は複雑に、しかも精巧に造られているという事実を改めて確認するのです。

私たち人間は、自分の力で生きていると思ってしまいます。それは神様が私たちを深く愛し、あたたかいまなざしをもって導いてくださることでもあります。いろいろなニュースが流れて来る現代社会です。矛盾に満ちたこの社会、理不尽と思えるような社会の中で、人間は神様の愛を必要としています。そして聖書を通して、神様の愛を受け取っていただきたいと心から願っています。新しい年も神様の祝福と平安が豊かにありますようにお祈りいたします。